

著名人アーキタイプ研究 『千利休』

現在の日本の茶道を確立した人として、世界で名声のある人物が「千利休」千利休は、もう一つの茶名を宗易（ソウエキ）や抛筌斎（ホウセンサイ）といい“全部投げ出す”という意味がある。『千利休』を選んだ理由は、私がフラワーエッセンスの道と同時に茶道の道に入ったので、研究しようと決めた。千利休は日本で、どういう人だったのか茶道を習うものとしてお話ししながら進めたいと思う。以降千利休を利休と表示する。

利休が生きた時代は戦国時代であり、常に自分の美意識に従うことに素直に生きて来た茶人と世間ではみられている。現代の言葉で彼の仕事を表現すれば、「建築家・デザイナー・総合プロデューサー」といったところであろう。その才能は強いカリスマ性で、人から恨みをかう程で恐ろしくもあり歴史上の武将、織田信長や豊臣秀吉に比べ、影で公正に物申すことが出来たのが茶会を指揮する茶頭の座にいた利休の役割であったようだ。

そもそも茶道は“茶経・サキョウ”として仏教の禅寺に伝わる。禅の修行の一つで、後に政治の中に組み込まれていくが織田信長の時代に顕著に現れる。

東洋思想の「陰陽五行」を根底におき、禅寺から武士階級、町民階級へと降ろし、日々の暮らしの中に自然にその思想を組み込む工夫を完成したことが利休の最たる偉業であろう。

侘び茶の始祖である村田珠光（ムラタジュコウ）に学んだ武野紹鷗（タケノジョウオウ）に弟子入りした利休は、禅の道は初心者が簡単に理解するのは難しく茶道は長年の修行経験でやっと到達出来る境地である。しかしその一方で、初心者を見下してはいけない。

「日々の稽古と作為の両方が必要で良い先生の元で基本をキチンと習い養われ、それから自分で新しい工夫をなさい。ただし謙虚に…」こう入門者の心得と論じている。

結論からいうと「利休のアーキタイプ」をロータス（蓮）として考える。

生活の中では、幼少より頭のきれいな子供時代を観察し、はじめはナスチウムだと感じていた。読み書き計算に、日常をおきながら幼少時代から大人の社会で生き子供らしく過ごす時間が無かったことと、育った環境からも思考エネルギーを使いすぎている日常に有った。調和にあるときは輝くような活力で「意識」とその生命の対極の「経験」のバランスが調和される点でそう思っていた。

利休は茶道の時間に精神性、霊性とのバランスをはかっている。ナスチウムとロータスの違いはロータスのタイプは、より精神性の世界を大切にしており、そのプライドや慢心は感情によってぶれることは無く世俗の世界に自らを落すことは無いだろう。宗教的でもある茶道は人のあり方こそを説く。人道的でありすべての地位の格差を超えたところに一時の静寂を与え、自分を取り戻し復活させる。激しい戦場にあつて精神世界の中にいられた存在。

戦国時代にあつて戦場でも茶を点てた利休は、ロータスのアーキタイプを代表する人物といっても良いだろう

う。

利休が生まれた 16 世紀初頭の大阪の堺は、自由都市として繁栄し貿易で経済的に豊かに潤い商業都市として発展、読み書き・算術の教育に熱心で印刷技術の導入で情報社会に成長していた。

疎開して来た貴族や僧侶達と町民が交流し、新しい文化を築いていた。利休は、大阪の堺で貿易のための貸し倉庫業と魚問屋を営む商人の子として生まれ、幼少から大陸から渡った品々を見て育ち茶道に親しんだ。

千阿見（センアミ）が祖父であったことも利休の自己を確立する環境に値する。当時、頭を丸め僧形にすれば身分を越え將軍の傍に仕える文化人（同朋衆・ドウボウシュウ）の地位が与えられた。祖父の千阿見は同朋衆だった。

他国の商業文化と、高僧達に伝承される文化教育を自然に感じ取れる環境で、知識人として学べた利休は 14 才で家業を継ぎ主となった。16 才で茶会を任される機会を与えられた。

常に経済と禪の世界を行き来しながら、大人びた子供の思考的生き方を受け入れていた。青年になった利休の生きる場所は、茶の道へ。彼は武家社会の中で、物質として茶道具を利用し悩みながらも流されていく。

大陸から伝わった由緒ある茶道具や、偉人達が所有した尊ばれた茶道具を“名物・メイブツ”といい倉庫が集まる大阪の堺に対し織田信長は「名物狩り（高い値で買いあさる）」を行った。そしてそれらの名物茶道具を、軍功を立てた武将に分け与えた。茶の湯を許可制にしたわけである。これを「茶の湯御政道」といった。武士にとって茶の湯は功労の証、ステイタスになった。従って信長の武将たちは城一國よりも茶道具を望んだほどである。

力関係が支配していた戦国時代に敵を倒すことは疑問の余地がない。士気を高めるために物質を利用した政策に千利休が物の値をつり上げ、茶道具を高く売りすぎたと思う人もいたが彼の評価は絶対だったので、政治が動いていく様に自らの心が禪の教えからかけ離れていくことに苦しんでいたのも事実だったようだ。

時代が織田信長から、百姓の出からはい上がった豊臣秀吉となると次々と課題を与えられた。引継がれた伝統に固執しない自由な提案をする秀吉に、利休も創造力を刺激されたことだろう。秀吉の北野の森で行われた大茶会は、京都の朝廷や民衆に自己権力を示すために、聚楽第造営と併行して大規模なイベントを開催することを企てた。

同月末より、諸大名・公家や京都・[大坂](#)・[堺](#)の[茶人](#)などに10月上旬に茶会を開く旨の朱印状を出し、続いて7月28日（旧暦8月31日）に京都・五条などに以下のような触書を出した。

○北野の森において10月1日（旧暦11月1日）より10日間、大規模な茶会を開き、秀吉が自らの名物（茶道具）を[数寄](#)執心の者（名物マニア）に公開すること

○[茶湯](#)執心の者は若党、町人、百姓を問わず、釜1つ、釣瓶1つ、呑物1つ、茶道具が無い物は替わりになる物でもいいので持参して参加すること

○座敷は北野の森の松原に畳2畳分を設置し、服装・履物・席次などは一切問わないものとする

○日本は言うまでもなく、数寄心がけのある者は[唐国](#)からでも参加すること

○遠国からの者に配慮して10日まで開催することにしたこと

○こうした配慮にも関わらず参加しない者は、今後茶湯を行ってはならない。茶湯の心得がある者に対しては場所・出自を問わずに秀吉が目の前で茶を立てること

この大茶会の総指揮に当たった利休は、戦国時代にあつてこの大茶会をキッカケに、黄金の茶室の設計などを行

う一方、草庵茶室の創出・楽茶碗の製作・竹の花入の使用をはじめなど、更に侘び茶の完成へと向かっていく。秀吉はまさに利休のソウルメイト的存在であったのだ。

秀吉の宮中献茶に奉仕した際、正親町天皇（オオギマチテンノウ）より利休居士の号を与えられた。

名誉も与えられて増々利休は秀吉の思う茶道についていけなくなったのかもしれない。利休も年老いていくと出兵先で茶を点てる気力を失う。秀吉の天下取りの情熱についていけなくなった。

当時は長く続いた戦乱の世が一区切りしてひと時の平和と繁栄に酔う、『豊臣バブル』とでもいえる時代。だからこそ大茶会も開く財力もあったのだ。

貴族、大名、商人、文化人など、幅広い層の保護や支持を受けて栄えた禅寺として名を伝える大徳寺は、室町時代以降、一休宗純（イツキウソウジュン）をはじめとする名僧を輩出した。侘び茶を創始した村田珠光などの東山文化を担う人びとが一休に参禅して以来、大徳寺は茶の湯の世界とも縁が深く、武野紹鷗、千利休をはじめ多くの茶人が大徳寺と関係をもっている。1453年の火災と応仁の乱で当初の伽藍を焼失したが、一休宗純が堺の豪商らの協力をえて復興。近世以降も豊臣秀吉ら諸大名の帰依を受けた。その大徳寺に天下一の茶匠となった利休は長い間、そのまま放置されていた大徳寺三門（山門）を見かねて、楼閣築造費用に寄進をした。こうして天正 17（1589）年、楼閣が築かれたが、楼上に諸仏とともに利休の木像が納められた。その姿は、雪駄（セッタ）履きで杖を付いた立像であり「そんな門の下を秀吉や高貴な人を通らせるのか」と秀吉やその取り巻き達が立腹し、利休に切腹申し立てる。頭を下げ謝れば許すとも言い渡した。

さびれた大徳寺にとって山門を寄進してくれた、また社会的にも茶道の第一人者として有名な利休の木像を飾るということはそれほど特別なことではなかったかもしれない。それまでの武家の価値観とは対極の平和の象徴の利休が提唱する『茶の湯』の価値観である。『利休の言うお茶の心』とは『市中の山居』、『忙中閑あり』で、中国の仙人のように世俗と交渉を断って山中に引きこもってしまうことではない。むしろ利休が茶会でなにかすると翌日にはみんながそれを真似すると言ったトレンドリーダーであった。政治的にも重要なポストを占め、武家も庶民もみんなが利休の動向に注目していた。『目立ちたがり』というのはまさに処罰した秀吉の側の主張で、利休にしてみれば『何を今更』と言ったかも知れず。『どうして固辞しなかったのか』といえ、秀吉のジェラシーや怒りに頭を下げてまで受け入れて自分の美德を枉（マ）げず…といったところか想像の範疇である。

秀吉からの切腹申し立てから 2 年後、2 月 28 日、利休（70 歳）は切腹した。

生前、利休は助命嘆願など一切しなかったのだ、それがまた秀吉の怒りを増す結果になった。

秀吉は利休からの謝罪を求め『許す』覚悟があった。しかし、理不尽である死（＝自害）を選んだのだ。事実、秀吉は將軍と茶頭以上の信頼関係に、利休亡き後、利休の茶道への功績に気づき彼の切腹をもって千家は罪を許された。

切腹に答え自ら腹を切り自分の美德を貫き通した利休は、最後まで自分のプライドを貫き通したのだろう。

ここでもロータスの性質を伺える。死と美德の間での選択は計り知れないだろうが、戦国時代に生まれた利休の

魂の目的は一体なんだったのか？

現代の感覚でものごとを考えようとしたら、矛盾が多くて理解が難しい。

政治の中に、精神性の高い宗教観を捉える大切な時間を作ること。この行動が始めはわからなかった。政治からはなれ、仏門に入った方がより精神修行を積めるのではないかと私に問われた。

武将達の天下取りは現代の政権交代と同じ。この時代は力が優先する。シンプルだ。大勢の人が命をかけて家族と何日も離れて戦いに向かう。その政権として日本の何を変えたくて戦国時代が続いていたのかわからない。

だからこそ、もう一度心に問い天の導きを通じて目の前の命と向き合うための時間を利休は必要に感じていたのではないだろうか。茶道を政治に活かすと考えると、戦地で茶を点てるなど並大抵の神経では出来ない行動である。

利休が説いた茶道の精神『忙中閑あり』という言葉があてはまる。

戦地にあり、心が精神と離れがちになるからこそ必要な茶道を武将達に説いたことの業績を私は見落としていた。戦地にあっても自分の中の芸術性も忘れてはいない利休。自然にふれ山居のような茶室を生み出した侘び茶も、戦国にあって大地との繋がりを思い出す工夫。16世紀にすでに、現代都会の戦場のような経済競争の社会の中で大地との繋がりを意図していただろうか。利休の功績は現在でも生かされる。**泥の中から這い上がって咲くロータスはアジアの聖なる花の代表。**

利休の究極にまで高めた美德は、切腹をもって守られた。

自分（利休）のレベルにまで追いつこうとしないものは、あえて引き上げない。

厳しすぎる態度は彼の父性として、豊臣秀吉の師として、自分が死をもって養われることを知っていたのかもしれない。

茶道は第二次世界大戦下にあっても女性達にも開かれ。現在まで伝えられている。最近若い女性の入門者も増えている。私もこの物質と精神の間で調和する自分の魂を学び続けるだろう。今は道具の茶道より自由に茶を親しむ時代を望んでいる。今でも侘び茶は自然との一体化を『美』と捉えている